廣讃寺ジャーナル

第145号
（発行所）
真宗大谷派
松岡山 廣讃寺
中村区城屋敷町3-30
TEL(052)411-5301
FAX(052)411-5341
携帯 090-1568-4623
〈E-mail〉
matsuoka@kosanji.or.jp

「不安」が呼び覚ます「生」の実感

田中 智教

昨今、新型コロナウイルスの猛威は留まるところを知らず、世界人類の生命に甚大な危機をもたらし、世の中は「不安」で溢れています。この危機的状況にあって仏教はどのように応えてくれるのか考えさせられます。当然のことながら、宗教や思想の分野でワクチンを作ることはできませんし、より一層、薬品研究や医療現場で感染リスクを抱えながらも身を削って働く方々に頭が下がります。生死無常の理とはいえ、すんなりと死を受け入れることができない私に、親鸞聖人が得度（出家）の際に詠んだとされる和歌がこれまで以上に響いてきました。

明日ありと思う心のあだ桜
夜半に嵐の吹かぬものかは

『親鸞聖人絵詞伝』

《明日も咲いているだろうと思っていた桜も、夜のうちに嵐が吹いて散ってしまうかもしれない》

聖人が9歳の時、僧侶になるために比叡山の慈円を訪ねた。すでに夜が更けていたため「得度式は明日にしよう」と促され

た。聖人は「明日まで待てないから今すぐ得度したい」と申し出た。その時に詠んだ和歌とされます。自分の命を桜に喩え、明日には散ってしまうかもしれないという人間存在をはっきりと自覚した言葉、あるいは時機を逃さない態度など、9歳とは思えない和歌に讃嘆されることは良く知られるところです。その時の聖人の感情とは――。

日本古来、「言葉とも呼ぶことのできない呻（うめ）き」から和歌は始まったと聞き及びます。また、聖人が得度されたのは1181年、「養和の飢饉」という大飢饉が発生した年で、餓死する人は大変多く、社会全体が混乱していたといいます。つまり、ここでの和歌はまさに幼き聖人の「不安」から紡ぎだされたものであったに違いないと思うのです。

生に執着し、死を遠ざけて生活している私たちは、生きることの意味を見失っているともいえます。反対に、死が身近に迫り「不安」が募ることによって生きていることの実感ができます。「私はコロナにかからない」なんて楽観せず、「不安」に思う気持ちから目を背けず、一日一日を大切に生き、廣讃寺にて再会できますことを心から念じております。

不安よこんにちは

新型コロナがまん延し緊急事態宣言が出された。人が集まってはいけない、人と会うな、という中でとてつもなく暗い閉塞感の中で生活する。少しでも体調が

悪くなると新型コロナに感染したのではないかと不安になる。自分が感染していて他人に感染させてしまうのでは、ということも頭をよぎる。

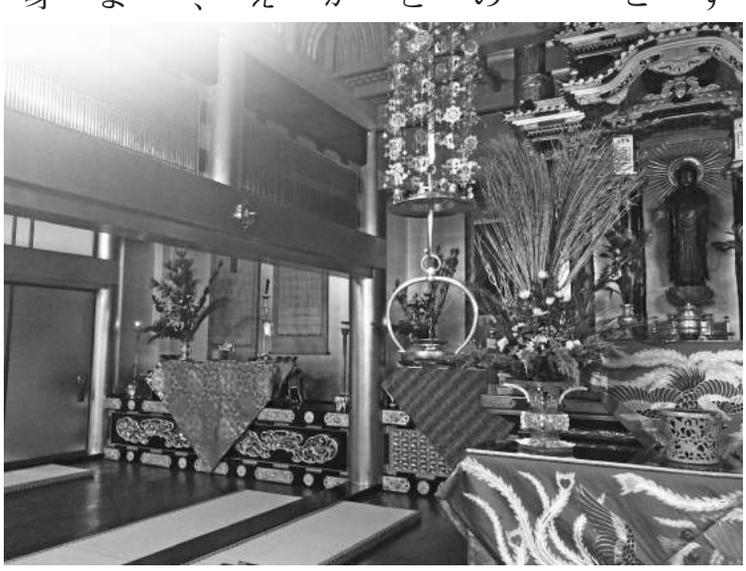
今ここで感染したら、医療は崩壊しかかっているので自宅でこれといった薬もなく苦しまなくてはいけないのかと思うと恐怖でしかない。さらに重症のさきには死がある。外国の感染者数や死亡者数をみると、それと同じように日本でも起これば、自分が感染する確率は絶望的に高い。報道をみるたびにその不安は大きくなる。

もし今回の新型コロナで死んだら、今までの自分は何だっただろうと、ふと考える。健康のためだと思って食生活に気を付けたり、運動したりしたが結局は疫病で死んでいくのか。これからのいろいろな予定、計画もすべてが消えてしまうのかと。

ただそこまで考えていくと、このことは疫病に限ったことではない。他の病気にかかって死ぬことにだってあてはまる。

生まれた瞬間から私たちは死ぬ病にかかっている。死ぬのはいつかわからないが必ず死ぬ。死ぬ原因もわからないが必ず死ぬ。逃れることはできない。

普段は死ぬのはまだ先のことであろうとたかをくくって考えていなかったが、新型コロナにより、死ぬのは身



近なことだと突き付けられた。

ただ親鸞も蓮如も疫病を前にしたときに疫病を完全に受け入れているのである。もし疫病にかかって死のうともそれを受け入れる。逃れようとしても絶対に避けられない死を受け入れるということにより安心が生まれる。死というもので完結するのではなく、その先を親鸞も蓮如もみつけていたのだと思う。

仏さんの教えは日なたでは聞こえない。暗く何も見えなくなったときに必ず仏さんは現れる。

行事予定

今後の廣讃寺行事予定につきましては新型コロナの状況がどのようになるかが予測できないため、今月号は掲載いたしません。五月の予定としましてはすべて中止とし、五月五日の復興永代経と二十八日の二十八日講は内勤めとさせていただきます。

六月は現時点（四月八日時点）では未定です。

こんな不安な時こそ皆が本堂に集まり、語り合い、勤行、聞法することが大事だと思いますが誠に残念でなりません。しかし今こそぜひご自宅のお仏壇の前でお参りください。

一人いて悲しい時は二人いると思え。
二人いて悲しい時は三人いると思え。
その一人は親鸞なり

と親鸞聖人はおっしゃっております。